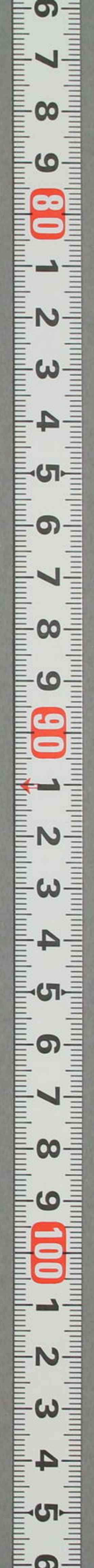
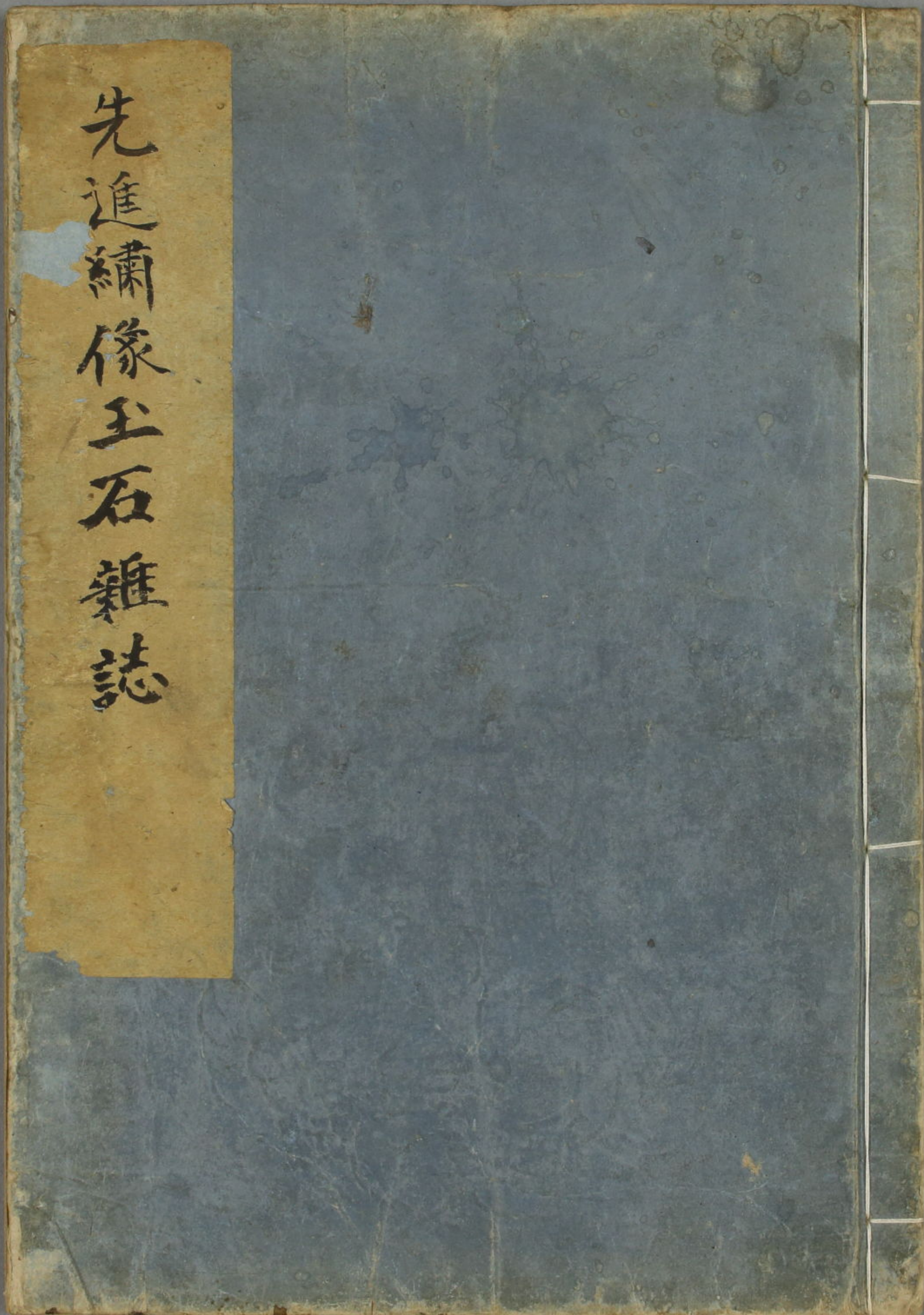
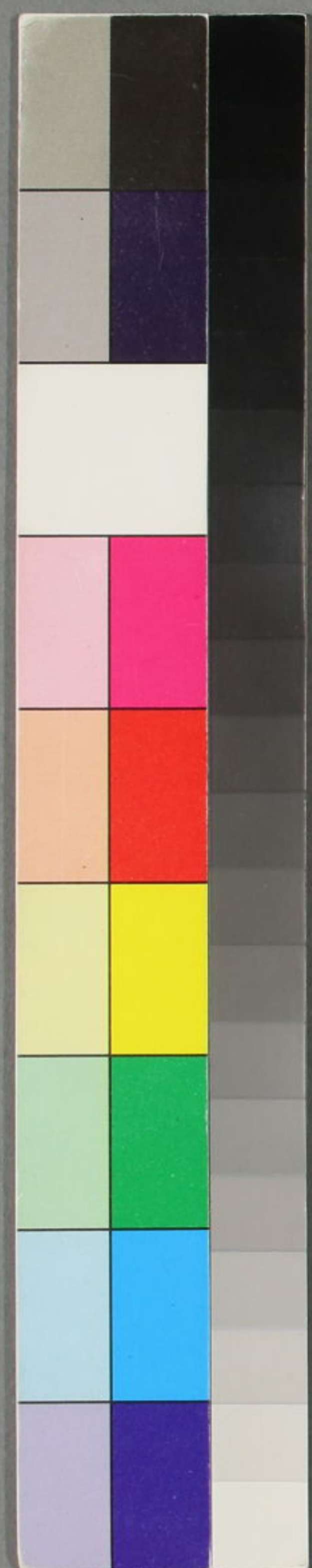


先進繡像玉石雜誌



柳菴栗原氏編

先進  
玉石雜誌  
繡像

東都書林 知新堂發兌

河合氏藏書

先進繡像玉石雜誌卷第一目錄

北畠權大納言源親房御真像

今入道宗玄准三后真影并傳

硯箱

塵尾

八足机

帖縁乃繪

以上圖中

銅硯

服中叙位

服者乃扇を任をら終一と

五十日除服出仕

井學院別當

三任局

出家後叙位

神皇正統記

職原抄

伊豆官内少輔朝

鎌倉より小田城迄乃行程

高師冬

吉見彦次郎頼玄

長沢駿河守宗干

下妻正負

佐竹上総介貞義

関城書の一

結城修理大夫親朝

礦史

准三官



紀列林鸞軒

贈正三位左中将橋正成卿真影并傳

正成卿誕生地

百日詣

正成卿梵火被

軍勢押乃杉程

湯淺定佛

宇都宮公綱

宇都宮座王織

千早城

飯盛山

檢非違使廳

花山院

九畹

湊川墓

六万寺村塔

觀心寺首塚

頼山陽乃論

先進繡像玉石雜誌卷第一

余齟齬より文武聞人達士奇伎名工乃名を集録を  
ることを好む長とけり及く系譜を乾く年齒仍壯生  
卒を劄記し又肖像墨蹟より其遺愛の器械を圖寫  
簾中ふ収免時々林頭よ黙着し焚薊々其高風餘  
韻を歎羨し其胸襟心情を追慕とる久し是歳  
尚友堂岡村生川尻氏を合し余家より来り梨棗を  
壽きんと云孟子の所謂一郷の善士乃天下乃善士  
を友とすく足らば古の人を尚福と云を學ん  
とにも非をた小兒輩温故の措梯とよからけ幸  
甚と云柳菴陳人栗原信充誌

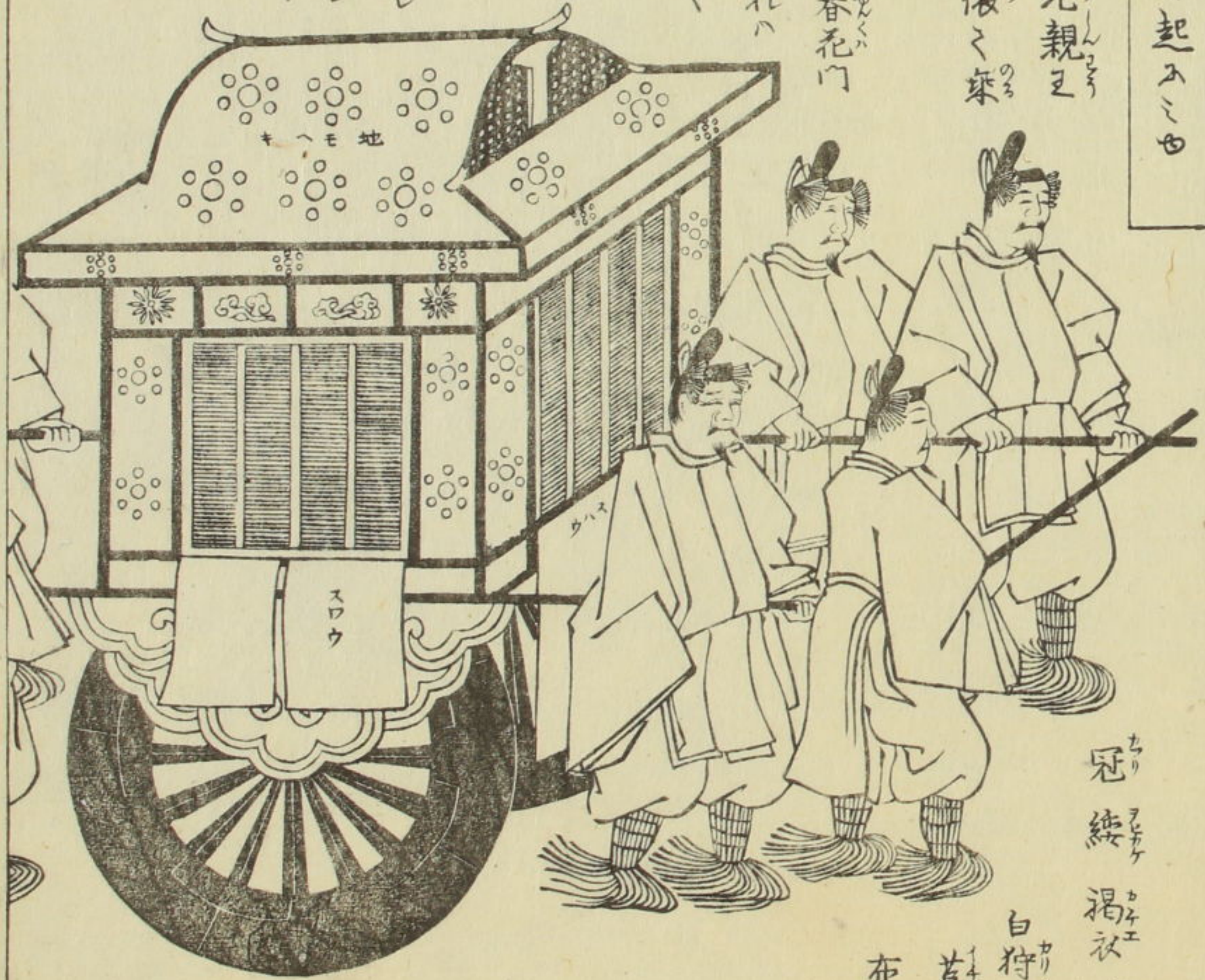
北畠權大納言源親房卿像



輦車 石山縁起みこ也

西宮記み輦車太子老親之  
大臣僧正等宣旨不依く衆  
とあり  
蛙抄み侍賢門より春花門  
ちく衆用るより見ゆれハ  
下衆より内を別おろく  
衆用る物と一ハ

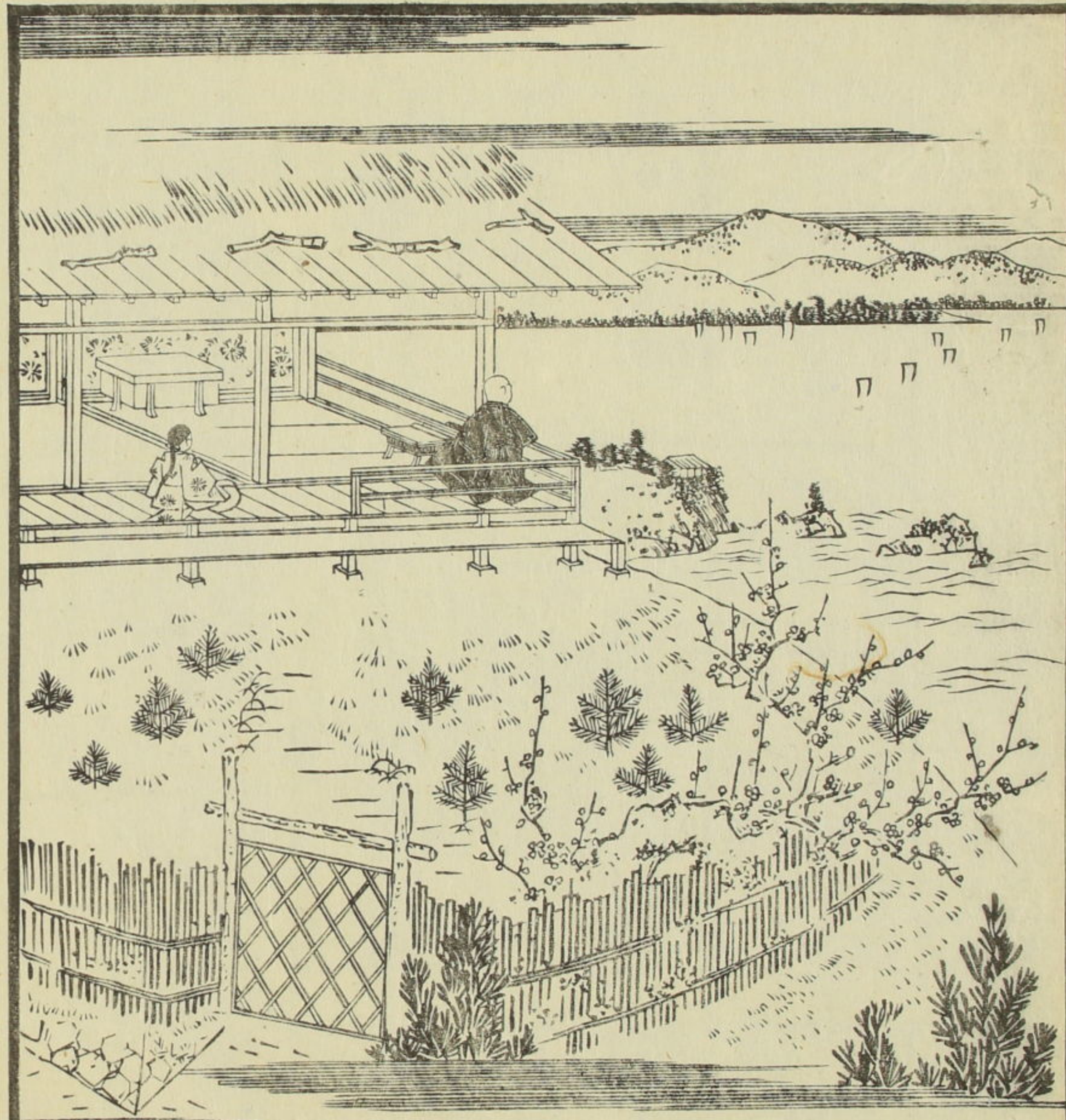
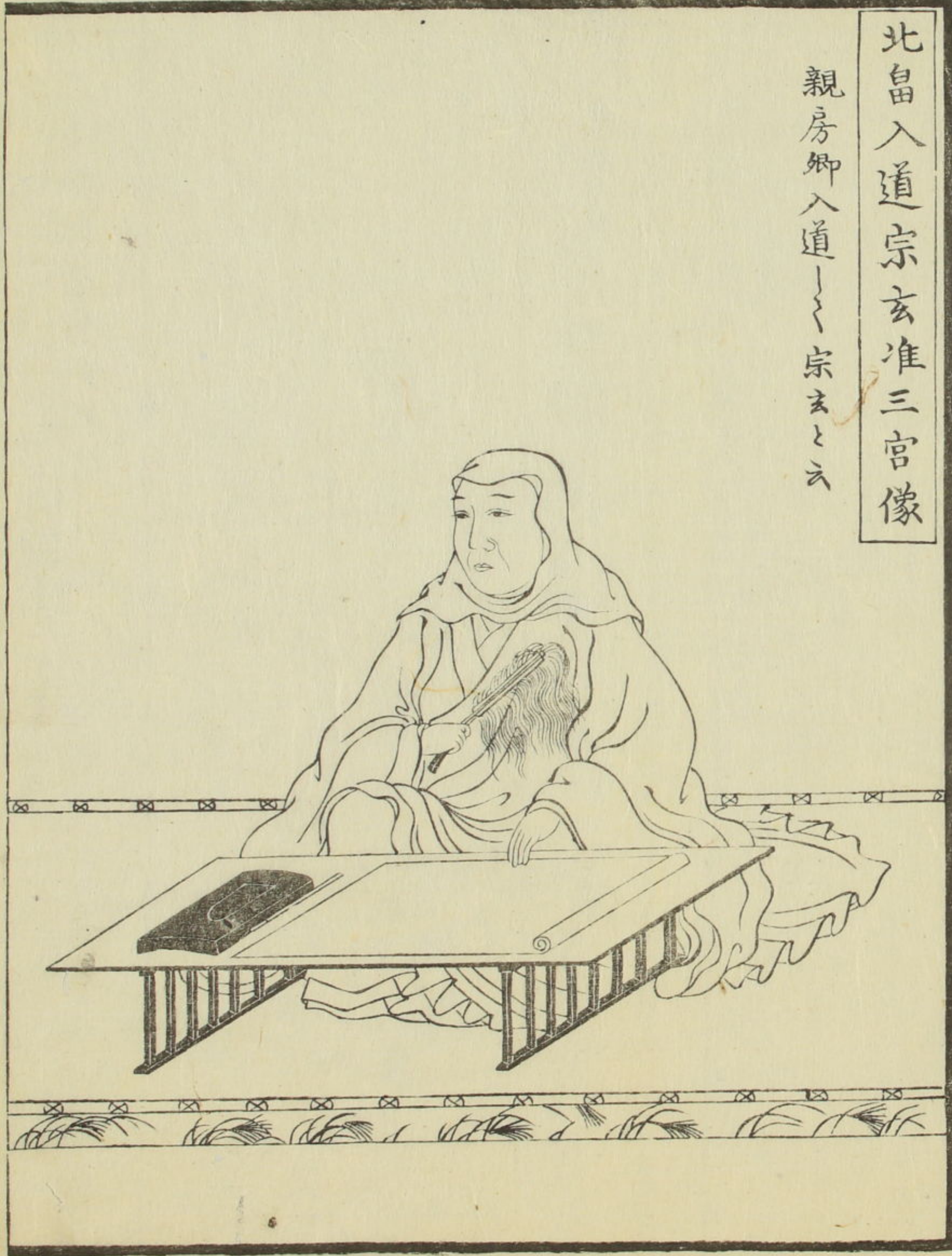
高野山無量壽院  
深覺大僧正乃衆れ  
輦車の圖ハあれと大ニ  
異あり何ふあり一ハ  
その原本いふ



冠 緋  
襦袢 褐衣 袖ケリ  
白狩袴 色ハナメ  
藁腰衣  
布帯

北畠入道宗玄准三宮像

親房卿入道一々宗玄と云

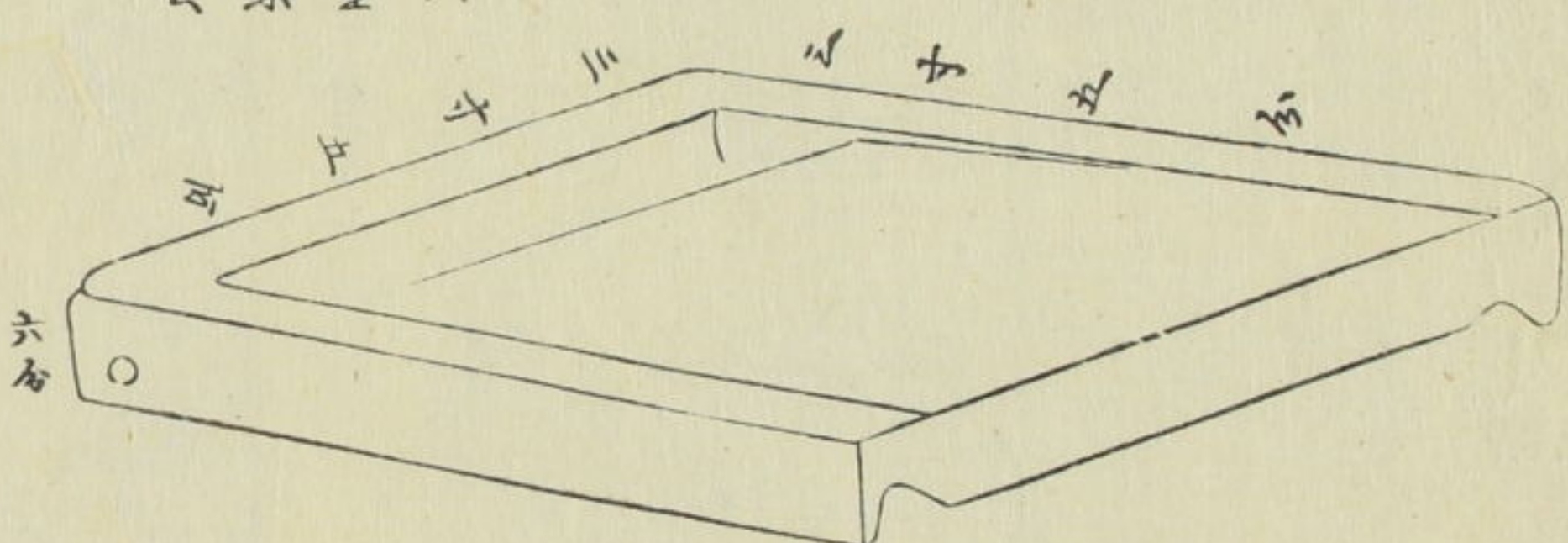


北畠入道准三宮  
林篁軒を  
常居  
南を  
軍機を  
と云

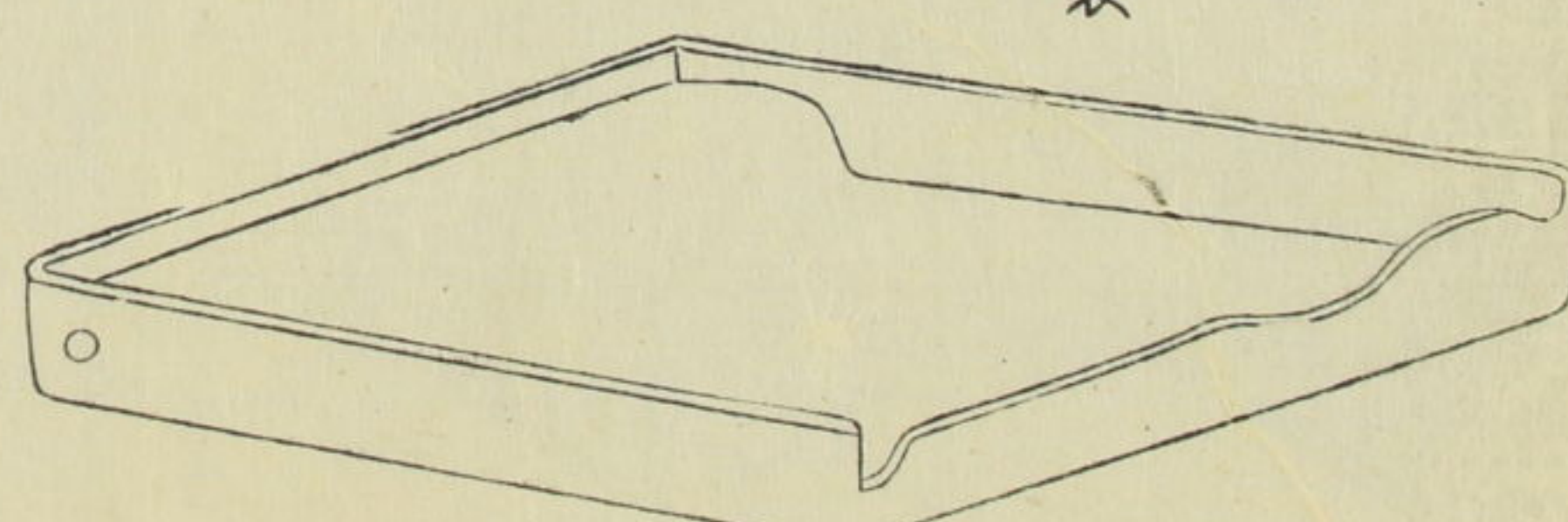
北畠親房卿銅硯

伊勢國松坂小野田氏所藏

表



裏



小野田某ハ北畠親房卿ノ  
仕ク去ルノ軍切アリシ大  
湊出帆乃時小ハ銅硯及重  
宝を與ヘクハコトハ松坂小  
住トハ之を命じりト云

北畠入道宗玄准三后親房ハ村上天皇第七皇子中務卿  
具平親王十二代乃孫なり父入道前権大納言正二位源  
師重卿母々入道元少将隆重朝臣女永仁元年誕生あり  
けふを祖父大納言師親卿乃養子とて年六月廿四日  
後入位下子叙一赤元元年正月十一歳おと元少将登りて  
右近衛中将より川里任治三年十六歳よて從三位延喜  
二年正月三位とて參議に任一同二年元兵衛督おと檢非  
違使別前よりおされその年権中納言とて任一正和四年  
正月十六日祖父入道大納言師親卿薨とらゆり一は父の  
喪了准一義展迄ハ推中納言を解せらば然るも同  
年正月六日正二位子叙せられ  
喪葬令子ハ父母服紀一年  
養父母五月とあり父の

喪了唯せらるると云は一年の服あり正月乃々いさ、服の内  
 内かむと遠くハ慶雲二年十二月紀男父の服中百八  
 十日日よて叙位せし先蹤迎くハ徳治三年四月十二日  
 菅之位左兼卿乃父左副卿薨きりさく後二百二十三日  
 不しく正之位を叙せらるる一父保二年權中納言に還任  
 先例と同しありへきみや  
 あり親房卿權中納言を解き後ハ闕了ニ系公秀卿か  
 ちらまひき當時服者の闕を補任あると云は也ハ也  
 是ハ應永の頃よりハ服者の闕三年中納言に轉し元應  
 二年十月淳和院別當に補せらるる元亨二年正月十二日  
 實父師重卿の表了遭と云とも亡祖父乃遺命不依く重  
 服乃儀を用ひらるるハ旬の内終居ありて二月六日  
 除服出仕の宣下あり  
元和二年九月廿八日入道左大臣  
云衡公薨せり也、後中納言實衡  
 卿服解ありハの共六十一日不し十一月廿八日復任  
 ありハを速ありと云ハれるハ親房ハ十一月廿八日出  
 仕あり是今の父母五十日同三年正月權大納言に轉  
 と云ハるるとハあるへき

任ありて拜學院別當を兼給ハ西院別當ハ源氏公ハ才  
 云とも鳥羽院勅定了依く中院中長雅定心中二年正  
 云乃家了付せらるるハ職原抄了注せらるる  
 月内教坊別當に補せらるる元徳二年九月十七日廿八歳  
 不く出家あり法名宗玄教ハまじらふも満き教人乃何  
 事の意子協とて世を遁せ給ふよやと云了太宰帥世良  
 親王早世ありハ哀之乃餘里とかや  
世良親王ハ後醍醐  
天皇弟四皇子にて  
 母ハ民部卿三位局とハ親房卿妹なり護良親王と同母  
 不在よハ太平記了三位局を阿野公廉女とハ准后宣旨  
 ありハ新待賢門院の外戚乃親と云くハ甥おとす  
 云くハ誤なり  
 のそからハ幼稚の以繼より頼りまじらふも養育しにけ  
 恩愛ハあつと云ハる同と云とも親房卿ハ伏見後伏見  
 後二系花園南今人代了歷仕了有職乃聞え言く生り

比郷乃致仕隱遁ハ偏了朝家乃喜入庵ミ先兆と傾叶ナ  
人ト多リウけるトモ能る小いく不ともかく元弘乃亂出来  
て至正隱岐國へ遷幸ナリ備一宸襟を荒服の外より傷ミ  
之終ハ凶悍多擲の叛臣了苦くあらせよ入王承久乃往迹  
よひく大塔宮言雲親王を智深たくありく涉座て獨  
東夷の辱を受せ勢玉く以晝々野草乃蕪ふかく也扱ハ孤  
村乃懼了行ミ千辛万苦を盡せ遂る四方乃義兵を帥  
ハ中興恢復乃洪業を開けしむ親房郷乃陰子策策と  
旋らき切輯といへん元弘二年准大長乃宣下有  
て從一位了叙きりけ  
出家乃後々有任も無任るあるとあり  
三代實録了貞觀元年四品入康親王  
出家と記されて十四年の条了无品入康親王薨とあるあり知へ  
始る仁和寺の覺行法親王の之品了叙せらるるを始とく後

のち々めりりく人長みく出家乃後叙位ありく親房郷を  
以初と云へき入道の後准大長は比郷を以くとも云  
同三年八月五日子息冬議從三位顯家郷陸奥守を兼玉  
以義良親王を具しきり任國下向ありく時入一任  
相共陸奥國へ下ら勢玉以東夷接乃威嚴を指揮して  
ま京へ御りおらせけると中代蜂起して都鄙も騷ら  
志く成里是利尊氏卿付るか評定ありく時その罪  
いま明らありさふ了忽元弘乃忠勤を棄れけへき  
あり比と宮ひ一を以勲功乃勇士等深く志を通りて  
喜ハあへり能るふ尊氏卿護良親王と弒しきり  
たふ都へ聞えりはさハ尊氏卿追討有へくと定め  
ら新田元中將義貞朝臣を節度使とく関東へ下させ



けふ了義貞朝長箱根作下乃合我利をくく都へ還里  
勢一跡を追く為氏朝敵とありし後ハ大軍を引率くく之  
詰きく了るの延元元年正月十日之山門を憑よとられ  
て臨幸ありけり時ハ供奉きりけり西塔乃浄土院了淨  
寺り建しとけり皇居ハ東坂本大官乃彼岸所なり浄土院ハ  
餘王路嶮しく程遠く便宜ありとて後ち坂本  
へ移らしりと浄土之上上宮氏乃中下従人そらと謀く還幸  
ありけり入道一位を伊勢國へ下向ありく度會郡了坐  
より其年之止芳野公へ臨幸ありくハ入道一位伊勢  
國より芳野公へありて朝敵追討乃籌策を補佐あり  
鎮守府將軍顯家卿阿倍野よて討死し新田左中将足羽よ  
て流矢よ中く命を預く一人中開くありり君長とあり

を失履りゆるよ結城上野介宗廣入道道忠を勸免とあり  
同きり也義良親王了鎮守府將軍顯信卿親房卿之男結城  
入道等をさし添入道一位を輔弼くく延元三年閏七月廿  
八日伊勢國へ下向ありく八月十七日兵船二百余艘了乘里  
伊勢國大湊より纜を解て万里乃重波了帆を揚らあり  
九月十一日乃霄より俄に海上波高く風ま疾く天勢驟を  
浦く津くへ吹し勢らとを散くあり紗ける中ハ義良親  
王乃めされたる舟たぐ一艘船了逆あり伊勢國へ吹送し  
けふあり不思議あり入る一信乃船を東海より吹流し  
常陸國内海乃湊より吹着ありけ邊ハ小田治久知知あり即

小田城より今く東乃官軍を招き逆徒誅戮乃謀を盡さ  
せけり八月十六日主上芳野教あり崩御あり海義良  
親王踐祚あり是とも中乃皇居といひ争亂乃際即位  
乃朝儀闕たる多うけむを入る一位公憂くといふ人の  
餘り神皇正統記を著りて三種乃神器を奉り給ひ  
天照大神乃正統を芳野皇居におく海と申を明らけ  
辨せらるるも後まゝ職原抄を著りて芳野教へ進  
ら給ふ

神皇正統記今猶世傳る於慶安二年二月乃刊本あり  
羣書類從乃本あり櫻雲記の興國元年北畠源大納言  
親房卿神皇正統記を記しる常陸國より吉野へ獻じ

とあり興國元年ハ北朝曆應二年を是は天保壬寅より  
五百四年前なり親房卿に十七歳乃時なり職原鈔ハ興  
國二年吉野に於て編集し一卷の文書を考へし  
筆記きると云説ありとも伝へり櫻雲記の興國二年  
曆應三年 後村 吉野を帝都とすといふ處とも  
月卿雲密微少昇を除目強断絶せんといはれ二月下旬  
源親房常陸小田城より居りて職原鈔二卷を記し吉野へ  
獻しなる百官諸位職掌を指し如く末代に至る帝都の  
體と云川へ親房卿博識才學あり今本國に在りて文  
一卷も不讀しと輒く水をあるといふ只凡人乃新也  
とありとあり

奥列下向乃官軍遠江灘あゝ難い子達く漂流き由所云  
たア一入道一位ハ小田城ヲ入々義兵を集め宇都宮綱世  
ハ移たり一城を攻落し鎮守府將軍顯信卿ハ奥列子下向  
あゝく白河城ヲ捕獲し其勢御國中子振ふと云程子吉原  
佐竹乃一族馳向ひく合戦を致しけるり寄平打負く引退  
き興國三年八月宇津峯宮春日中將顯時一系少將具信  
唐搦肥後も經泰刑部大輔秀仲等小田城ヲ入り入道一位  
よ力を合を奥列あゝハ伊達宮内少輔仍朝山蔭中納言十六  
代の孫なり中納  
言政宗卿十田村左衛門南部滴石乃某官方あり斯波義子  
一世の祖也西郡へ打く出陣貫少羽と并ふ一族多く討死しあゝれハ  
興國八年三月廿九日佐竹結城相馬乃一族小田園西城へ

押寄く戦ひけふに月二日乃戦し寄平乃大将結城正朝  
をくあゝく佐竹乃一族百余人討死し引退くあゝれハ日  
春日中將顯時朝長園小田西城加勢のため伊佐城より出く  
野伏を驅遣し寄平乃兵糧を取らんとせしにり寄平終  
小打負く引退き爰に於て鎌倉乃執事高之河守師次ハ  
月廿二日園小田西城を攻んだめ殺向し六月十四日常陸國  
方穂庄陣をとり同く十月十日小田乃近所あゝ之村ハ  
打止り大軍乃押寄る勢を足さく矢合もあゝ數日を送る  
鎌倉より小田に至る國々相摸武義下総常陸と四國ハ涉  
ると云とも引程三十里餘り過き然るを六月廿二日より  
六月十四日と廿二日を經くもあゝ城を迫るものは

親房卿在家英雄乃公達とて朝儀乃典故を精しく  
おとすべしとのまゝに胸を太公望管敬仲の志を蘊め孫  
呉の兵法を鍛錬しよすべしを以て師をいふか教習謀也  
めくりし移ひんと其軍立を計りて速に進みたる  
遠寄ふしと筑城乃士卒乃銳利と挫んてと謀り  
と志らる

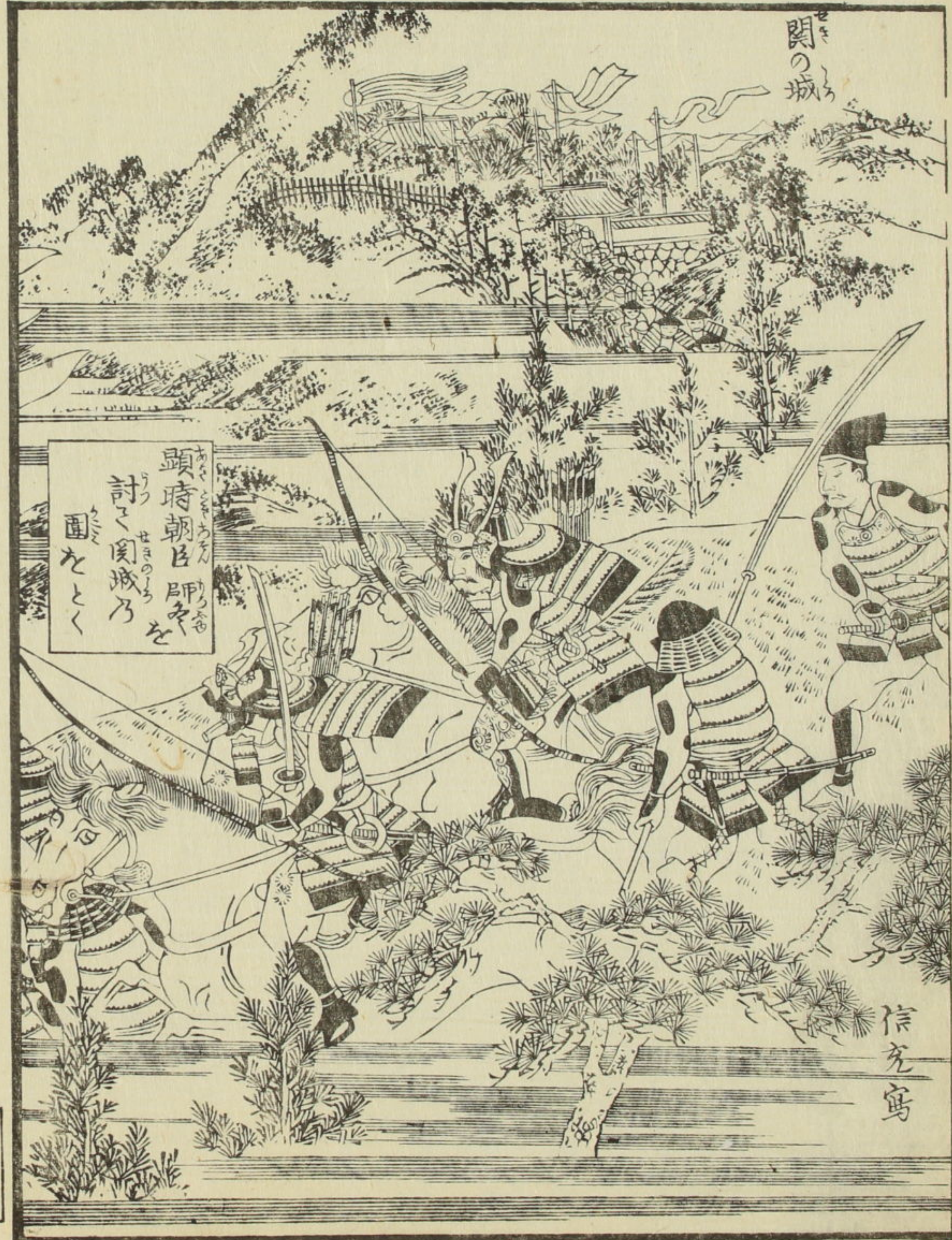
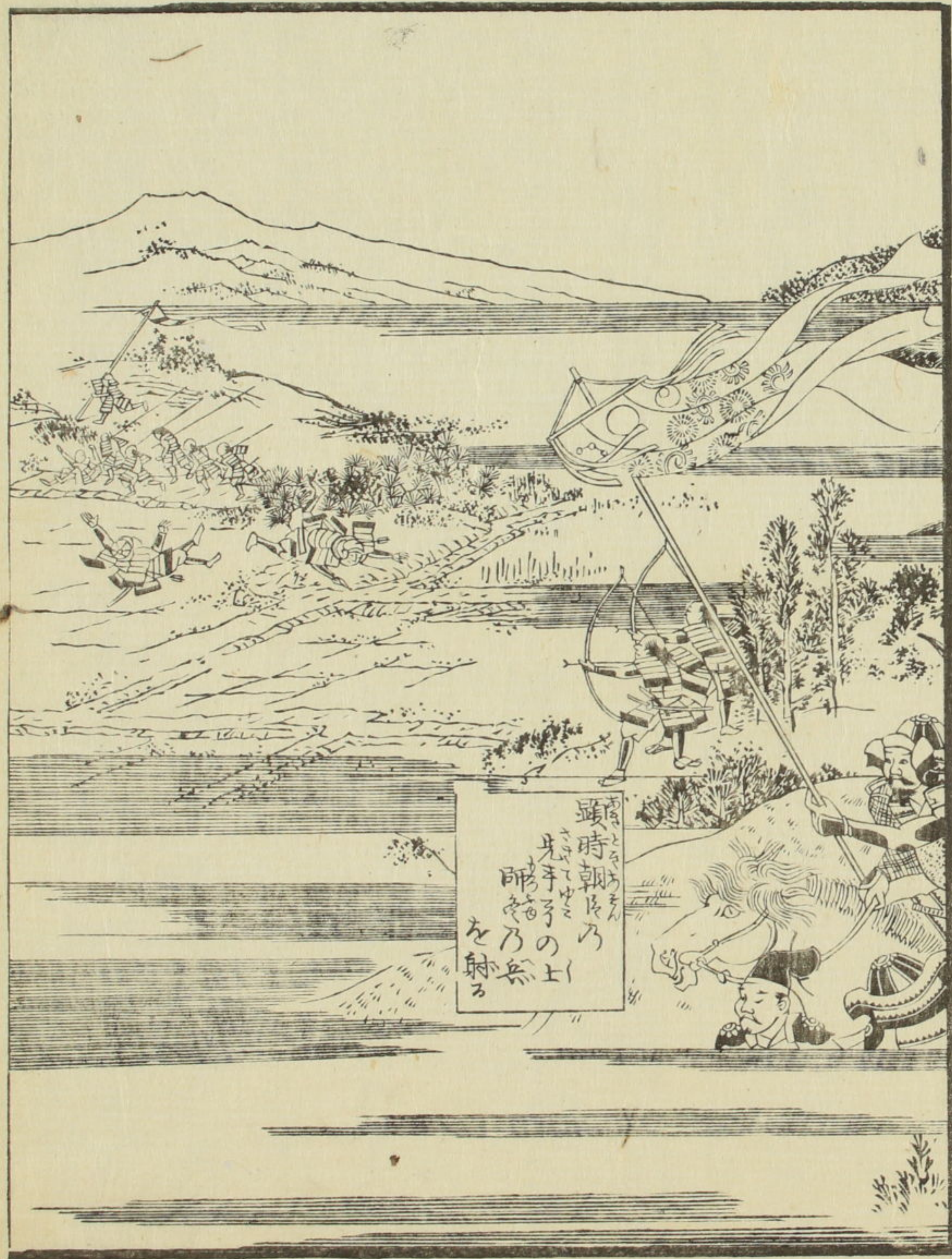
おあし月廿二日入道一位士卒を勇めし師を之村の  
陣へおし寄る短兵多し攻むべしと師を兵子餘  
人討死とあまをんく師を之村乃要害を引退くあくれ  
と廿四日乃早天を晴ふらたか官軍師を陣へ押寄る  
と云と師を出合に燈伏軍と引返す

高之河守師冬小田城を寄来るを興國四年の夏ありと  
云説はあまとも南朝紀傳に日次を追うたれを記すと  
詳なり依り是る従ふ師冬高武藏守師直乃猶子にて  
是より後七年正平四年北朝貞和四年なり尊氏の三男九馬頭基  
氏の執事とて上杉民部大輔憲顯と共り鎌倉を下向有  
志ありと頃を播磨書と云

七月七日武藏國住人吉見次郎頼武蒲冠者 範頼朝長  
孫 吉見次郎為頼  
の二男の中に入道一位乃招きに應じ味方し馳來り師を  
軍に新手乃加ふるをんく駒指城を引退く廿七日師を  
謀みく夜不乘し関小田兩城を襲人と云と入道一位  
か孫くけ事を知て用意ありしは寄手却り利を失人

廿八日入道一位乃兵進く師冬軍兵を發たつて八所目  
 垣本鷲文長光寺山にテ所乃城を燒拂ひて飯派の館  
 を攻落しその叔師冬陣を燒討つて師冬没落して  
 乃方をうら以九月師冬をうら以大軍を起して寄來る時  
 了長派駿河守宗干依義本秀御四代小山兼光の五代孫小山平政老二男長沼淡路守宗政七代乃孫あり父ハ淡路守秀行  
 と忽ち凶徒と與て却て味方を射る代頃入る一位置  
 小顯時より陸奥國白河乃結城親朝父子より加勢を徒人  
 と云とも親朝内志を凶徒に通て候るなり信保は從て  
 十月不及く小田治久も師冬をうら以て候るなり凶徒は  
 あり於て入る一位置津峯宮春日中將具信以下園城入  
 後ひら一知ふ後城ハ謀かまに似たりと宮と顯時朝長

とは下妻城へいを移し下妻正負の幼稚ありて軍務了地  
 さふを助る下妻氏ハ小山下野守朝政乃孫小山出羽守長村を祀とい長村小山と稱を教了至く弟乃修理亮  
 長政下妻乃家を嗣く其子三人長子政泰次男景政三男を下妻入道  
 長光と云正負ハ何人乃子と云とを考へ  
 十一月三日師冬小田治久佐竹正徳介貞義親羅三所義親十代孫常  
 陸水戸等を催して作田成る免陣と同日師冬園乃城  
 乃大手小押寄二子より日け師冬大寶派乃急小寺山  
 打く出園下妻西城乃從還路を塞ぐんと擬し師冬乃一旅  
 三戸七郎ハ去平高橋武列常列乃勢數子孫を率て大寶  
 乃城乃南長峯ふ打く城を眼下了んて我を一時決  
 きんと以て時園東丈うて逆徒於氏了與力く常陸園も  
 小田佐竹逆心より一は園中大うて敵了馳かより今ハ



郡下妻伊佐真壁西明寺中郡乃六城乃入道一位乃味  
方々々々勇氣凛々まねと異國本朝り可ふたりと同  
以あつる春日中将顯時朝臣一糸少将具信城中乃勇士  
まろくく打く出師冬陣へ馳向ひ息を継ぎ以てふ  
りく攻たりいは師冬乃若志志とありあつる  
右往左往了敗軍以官軍たぐ一時打勝ぬといふと  
敵々次第了勢加り味方子馳系於官軍もあつりけふ  
まろり入道一位使を白河へ遣り速く勢を率後卷  
きらふ危き由一封乃去翰子乃意をあら言贈り  
けるり親朝無勢乃中々出陣の備もあつりけふ  
父上野入道道右兄乃太田判官親光亡魂いふくや

とあふらんと余所乃決を還はせり十二月了至り師冬  
何とわりのひらん人数を引あま小田乃城へ引發り官軍  
了居一郡下妻乃城々々勢也兵を味方了せんため  
其等々一族共の師冬陣ありあまそのをく時く去  
を誘へ勢け色は忠義篤き勇士等も籠城了退屈く結  
句官軍を疎む色をあらけ顯信卿乃陸奥國小田り  
官軍を催供せりあつりくも國人半は逆徒了與刺  
結城親朝あつり替りく師冬志を通くとも同く  
也ハ白川乃路あつりく宮方乃城々次第了蒸失ける小  
より二月十六日一位入道より親朝乃許へ去翰を送らけ  
る此書翰を関城書と云忠信義勝文面顯を讀め  
涙を落さずおれふく諸葛孔明乃出師表了はま

月十三日親朝々官軍合體乃旗を巻く凶徒一味乃藝伎  
を師の陣へ遺りけふせうてつりける事共々

結城修理大夫為原親朝ハ鎮守府將軍為原秀卿朝長ハ

代小山下野判官政光下野判官とは下野の掾を云下世

判官と云々次男結城上野介朝光と云下野國結城

住しけしは結城とは名乗あり朝光乃嫡孫上野介

廣綱と云九衛門督晴朝十五代乃祖なり廣綱乃弟孫七

左衛門祐廣陸奥國白川郡に住しけしは白川結城と

辨と祐廣長男宗廣上野介に任し後に入道し道

忠と云元弘乃初より二心なき官軍あり建武四年ハ

月伊勢國阿濃津あり病死しけふ今ハ乃際りし水死

とも僧を供養を佛を祀るをた朝敵の首をとりて

墓乃前より切しけし苦しき氣を継ゆあり遺言と

太平記より見たる結城入道ハ獨男なり幼るふ父ハ玄葉の

いさ絶えたり不義不忠乃凶徒ハ與りハ孝なく忠

なき人非人とは是等をあそむへりり水

師あり乃礦夫をやとひ出し圍城を掘らせけり礦

夫とも取畫息をとりけり殺し圍城乃堀際あり

堀ぬきたらんとおり入時大地震動し數千人乃礦夫

とも一人も残らば壓ふされ地通乃中子死けるあり

を此かくし後々寄子城乃逆さかると柵をり鹿垣を

中人但遠巻りありて水に城中より兵を出し柵を



引のけ鹿垣を燒拂ひをすけふといへとも凶徒明らる  
勢加らる官軍兵を落しけし入道一位令を是とあり  
とく宇津峯宮を供奉し七の城を圍く芳野敏へ攻り集  
ら勢移へ時々紀列ありは伊勢國へ打ち出官軍乃勇  
氣をたけし方便を就里乃外にめぐらされは分門正平  
六年足利直義入道惠源高武親忠師直と中あはれと  
終る高氏と合戦し及んて芳野敏へ降参を請ふ  
時法御金議ありと許さずしと討定しを入を一位  
漢高祖と楚項羽と鴻溝を境と和睦し故事を引く偽  
て勅勅御免乃綸旨を中出しは係を及傾けし人あり  
とかや因六年准三宮乃宣旨ありと輦車入のり宮中

出入を許されり

准三宮とは太皇太后宮天子の御祖母 皇太后宮天子の御母 皇  
后宮天子の御妻 を云人長を以て比三宮乃准をさし  
深殿大臣忠仁公良房を初と以文徳天皇崩御乃後清  
和天皇即位幼雅を左を以て忠仁公攝政乃宣旨蒙りて  
後ハ一子太皇太后宮後原順子 仁明天皇の后 ハ忠仁公の妹  
皇太后宮後原明子 文徳天皇の后 ハ忠仁公乃女かまは三宮  
不准し食封を賜らるし後外祖た人等宣  
下りりくめたりしからし准后とも畧しく云ふ  
入道乃後乃准后乃宣旨ありし東三条攝政園白大  
相國兼家初と以東三条院乃外祖たり

おあーき七年閏二月十八日南朝後村上天皇。北朝崇光院乃文和元年  
 芳野敏より天王寺へ約幸ある入道准后親房乃指揮  
 より中院右衛門督顯能親房卿三男伊勢国司の祚あり  
 伊賀伊勢軍兵三子條路を率く地多うり多は同十九日  
 八幡へ約幸成く田中法印乃坊を皇居よりおき後同廿七日  
 官軍系へ打入是利義詮忽り迎江路さく落ゆ終片  
 入道准后をよみ顯能卿より系ふ至り義事乃成敗を執行  
 持明院本院光嚴院 新院光明院 主上崇光院 東宮後光院 去  
 野乃奥賀衣生と云處へ移り幸里梶井二不尊胤法親王  
 を付金剛山乃麓へおし免を命  
 後醍醐天皇芳野へ臨幸乃後光明院即位より海へ南

北西朝と分れたる一か正平七年二月五至と十六年  
 新田楠以下乃官軍晝夜をいと長幼を福せ何事  
 了心を勞し力を勵す以て其やた鳳輦を帝都に還幸  
 あり奉り宸襟を休め幸敷へ謀りて孫るり准后親房  
 卿父子乃忠誠より官軍義勇乃篤く依り北朝乃天  
 子を南へ幽閉し存るり多年の憤懐一時に開くと  
 云へり  
 帝都舊く復し僅に十日又日東夷西戎王化を服せ以  
 是利義詮と與力しけは三月十一日義詮都へ攻寄る  
 其勢数万騎及人由隊と等し官軍八幡乃陣陣へ引  
 返り決心慥くもあらうへ勢玉と云ふ月十一日河内国まで

還幸か我入道准后あまを見く宸軍我乃罪を以て  
 子帝徳乃至ら勢を以て我の如くと木を以てふより紀伊國  
 名草郡和歌浦乃北に草菴を營之林鶯軒と名付憶西  
 翁と名を改め終焉乃地を定めらばけふも功あり名遂  
 下必退之陶朱公の跡を慕ひ侃々子乃後房志を摸さ  
 新くと云座け色とも實を以て幾者吉之先乎とり入敷辭  
 乃聖旨を後とれくを不盈く文事あるもの必武備ありと  
 云言乃伝とへきを以てふかくく正平十一年 北朝延 12月  
 十八日庚辰春秋六十七歳ありて林鶯軒を薨せらば  
 とかや 林鶯軒は即紀伊和歌浦小人所り今林鶯山憶西院長  
 覺寺と云東本願寺御坊留守居是なり寺中法師重卿  
 御墓 天保壬寅より至るに百八十四年 正平九年薨と常樂記  
 あり

贈正三位左近衛中将橘正成卿真影

廣嚴室勝 禪寺安置



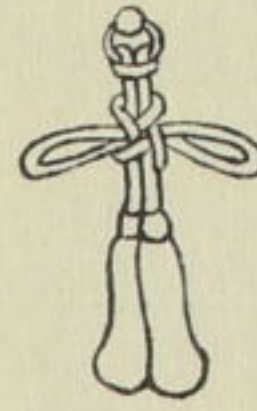
贈正三位左近衛中将攝正成卿ハ左近大夫将監正玄乃  
長男ハ一々永仁二年甲午歲河内國石川郡金剛山乃麓  
小誕生あり河内各所國會了石川郡水谷村乃領内山の  
并不あり田圃の中大將軍神社あり今乃三玄乃父を  
間乃齋跡を共六以正成郷誕生乃地也  
正俊と云金剛山麓七郷を領し館乃四方小捕を多く植  
たりしふより捕教と称せしと形り正俊を或ハ掃部助  
又正俊乃敏達天皇四代孫井手左大臣橋諸兄公十三代  
孫ありと云或ハ十六代苗裔と云太平記了ハ敏達天皇  
云とハ民間より下く四代孫井手左大臣橋諸兄公乃後胤たりと  
年久しと云々正玄乃妻の？了時志貴公の毘沙  
門了百日後と夢想を感しと設けし也ハと云正成郷若  
幼名を多門丸と云々勢し形り今按了河内國石川郡  
大和國志貴公了至る仍

程九十里餘了及人百日詣元弘元年八月廿四日後醍醐  
天皇笠置山へ遷幸ありし於ち萬里小路中納言後房卿  
を捕乃館へ下り後東夷征伐乃六と一向正成を憑忍衣  
ると仰らるしふより正成郷よりあえん志はひそ  
笠置乃皇居へ系り連合戦乃機密を云上ありと河内國  
へ歸り赤坂早の城擲を立たり連一族所信を駈遣し  
官軍與力乃義兵を擧り進出らば九月十一日河内國  
早馬を立く六波羅へ返を今考了後醍醐天皇笠置へ  
由笠置寺乃齋記了又也又太平記了九月二日笠置合戦と前  
後時ハ藤房卿の捕乃館へ移向し也正成郷乃笠置往復  
等を地圖了依り推考しと云笠置より柳生南都了出り  
麻了り了葛城山を越り石川郡なりと道十八里了餘り  
乃日次八月廿四日了九月二日了八日了際了あふへ赤坂  
乃營築九月二日了より十日了僅了八日の際了成就しと見

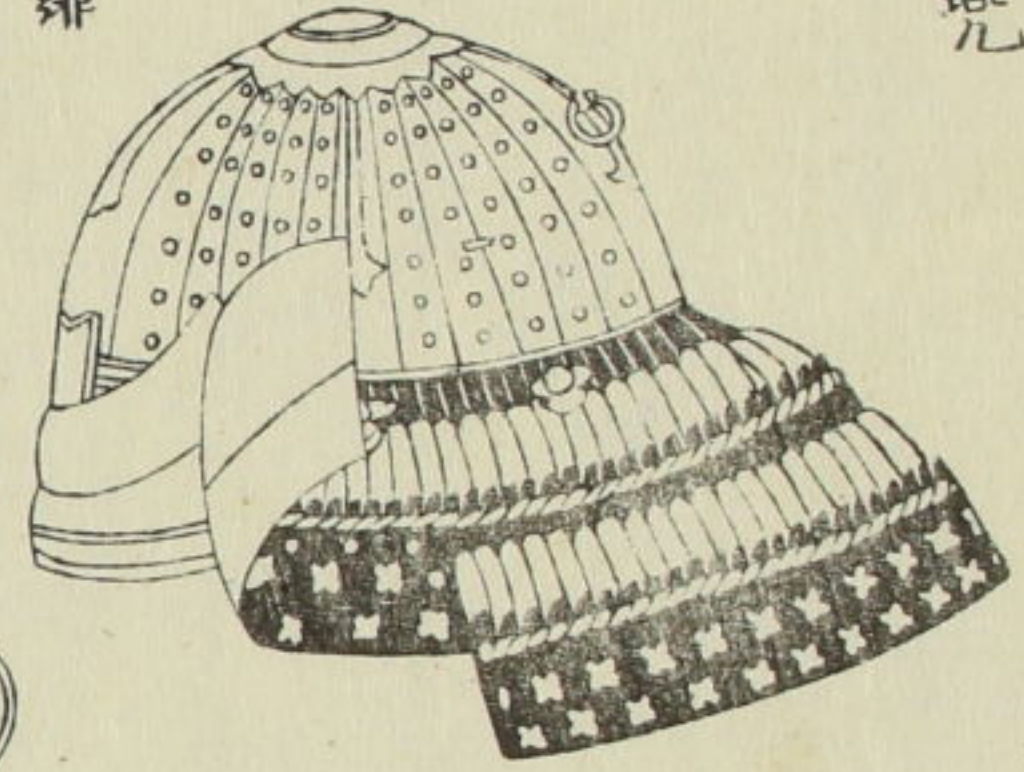
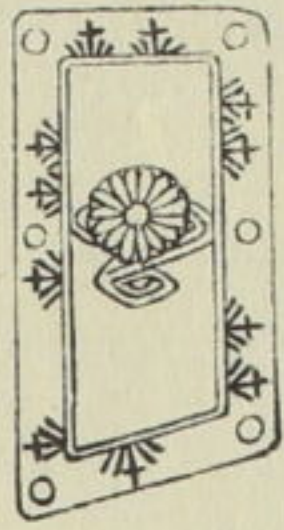
楠正成卿兜  
志貴山本覺院藏

四方白

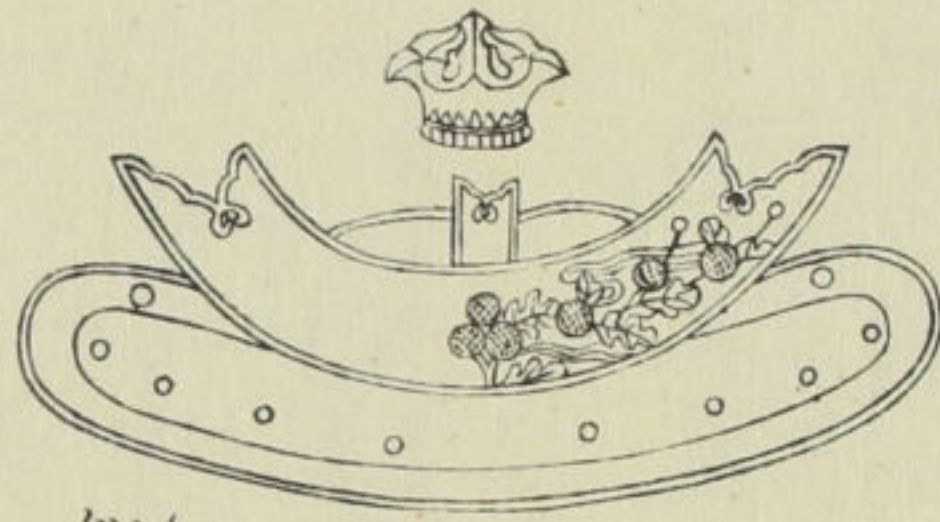
後證借  
緋



吹返



上白  
下藍  
二枚鞆



鉞形  
損失

楠正成卿大袖  
志貴山本覺院藏

小札長二寸二分黒漆

紫	小札
同	
白	
白	
紫	
白	
紫	
白	
菱	縫

左袖、永祿五年食正久家贈

烽 遠篝

軍防令了九

置烽皆相去四十里  
今の四里廿二  
町に十間あり

若山岡隔絶遂便宜安置者但使得相  
照見不  
必要限四十里  
若須放烽者晝

放相夜放火其烟盡一刻火盡一炬  
とり入義解了炬ハ東新ありとあはは薪を

焼く火を止めひとひとあき置烽之處  
相距各二十五歩とあり一炬のこつあきと

知へ一烽長ハ烽を守る長あり烽子ハ烽を以らさと家  
下あり火炬ハ乾葦作心葦上用乾草節縛處一周回挿

肥松明とあり後世乃遠篝此の類み推知へ

河内國葛城山中元弘年間  
楠正成卿遠やを燒く跡  
を今ハ銅釜石と云

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

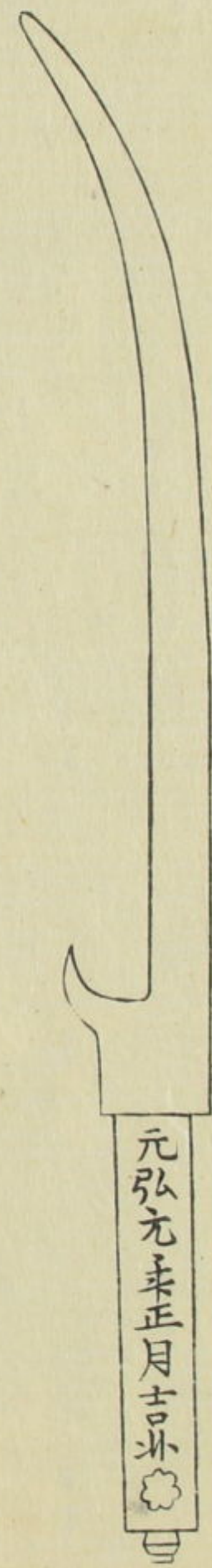
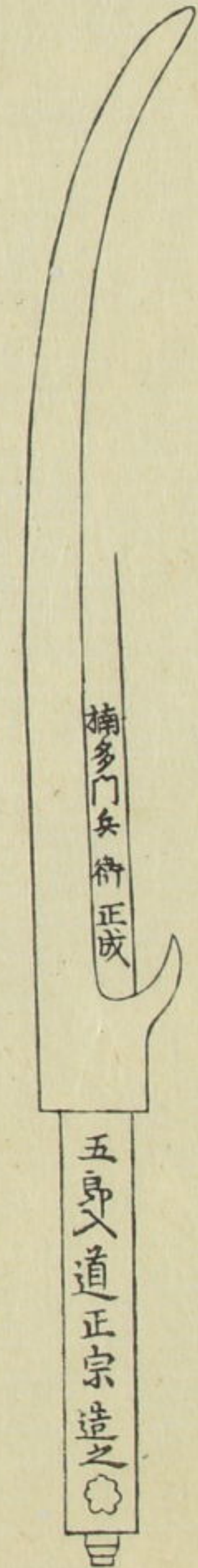
其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡

其位置  
の  
前  
正成卿  
の跡  
の跡



楠正成卿兜割鐵刀



此刀世人不知處一々募造き一のすく多くめつり一の  
 といへとも元弘元年の正宗鎌倉を去り上方に遊ひ一年に  
 正成卿のいさへ河内國赤坂より龍潜のころありあつたはけ  
 事いつよりあつたと由定めし一姑く存し一後の訂正をよ

西其神速あること人六波羅ふくは在系乃武士たつて  
 が子非るいこと一置へ馳向ひ折節多難ありり一  
 了是利法部と楠高氏大佛陸奥守貞直を始め廿万七子  
 六百余騎九月廿日鎌倉を三々同く晦日先陣脱了  
 濃尾張兩國の法を付後陣を於いさへ高師二村乃  
 さへたり今考ふ九月上旬に置置赤坂乃河内を鎌倉に  
 高師二村と云は速に二川向賀の同了ある高師二  
 と冬河内岡崎の二村山を云西云乃同今道十二里餘  
 あり義濃尾張と先陣熱河内を云云一里及ふ  
 八里半の里餘を三十三里押し不は一里九子及ふ  
 廿万七子六百余騎を三十三里押し不は一里九子及ふ  
 百騎を率一町に二百八十騎を率一町に二百八十騎  
 と云は法を付皇朝の軍の古法を御人の子と云  
 へはかかふ不とよ置置の城脱了落ぬと云  
 九月廿八日

刻置置城成火 赤坂乃城へ馳向ひて合戦し十月下旬雨烈しき物  
赤坂乃城へ馳向ひて合戦し十月下旬雨烈しき物  
正成郷備く自害せし時あり 赤坂城を繞り正成郷  
の行八歳 赤坂城を繞り正成郷の行八歳  
か六波羅入るもあまを實と思ひ湯浅孫六入道定佛  
を地頭し居立たり今八河内國に於て八歳  
あらしと心安く思ひける元弘二年四月三日正成郷又  
百餘騎を率て俄に湯浅の城へ押寄り息を止むるに攻  
我ふ折良城中に兵糧用意せしむるに湯浅の所領  
紀伊國阿瀬川 紀伊國有田郡阿瀬川村小湯浅定佛のよ  
城跡あり最湯浅氏に有田郡乃人たり  
又兵糧を収申不入んとする由を楠乃乃の所領に  
一ノ十八

次ふく是を奪ひて其後を乃具を入兵二三百人兵糧を  
運入す出さず城中へ入らんとす多と楠乃兵共おれを止  
めんと同志軍を仕りける湯浅城よりこれを見く其子兵  
糧を運入すとおりに城中に敵乃兵を城中へ引入るに楠  
乃兵おりに乃まに城中に入らば儀乃中より乃具を出  
た外時乃を乃まに城中に入らば儀乃中より乃具を出  
し操り攻入けしに定佛の子に降人し出楠は勢を合せて  
七百餘騎和泉河内を切兼け大勢をたりけしは六月十七  
日住吉天王寺に陣をとりけしに六波羅不同しは隅田次  
弟九郎通治高橋又は市宗康を軍の首領とす又子孫  
騎を天王寺へし向らぬ同女日京朝を三々尼ヶ崎津路



柱松乃色く陣を遠くを焼く時遅くと待あくは  
楠は中を因惣く馬に繩を繩ちて後進し鑄た刀を大  
る武者之百餘許波色乃橋より南ふいへる勢大く二三  
う折し焼きく相向へる時色ハ廿一日朝無務乃て終り見渡  
隅田高橋人よをもき人橋より下を一文字う打候し色ハ不  
きんと色くやうとける楠の勢これと見く一矢射遠入る  
て一戦ゆき天王寺の方へ引退く隅田高橋勝りの人馬  
乃息をよけり天王寺乃北乃在家に追りける楠  
不ふ六波羅勢をけりし時色く新軍兵二子餘勢を三  
手うけり一子天王寺乃東より敵を多ふて駈出川  
一手西乃門乃利のをもて魚鱗より小強お一手ハ任

吉乃松の蔭より鶴翼よりひき合と隅田高橋あきなる  
色ハ馬乃足三河より色ハ敵をあひき出しかけ合を  
かけ合を勝負を決せよと下知しけ色ハ入子餘勢波色乃  
橋をあき引返り楠をれを追馳く波色乃川岸より我  
けあき隅田高橋勝負く色ハ京へ引返り色ハ三日行あき  
あきりらん六波羅系より色ハを  
波色乃水いらるりやわんたうり色ハ隅田流ると色ハ  
と云蒸煙を書たてけ色ハ隅田高橋面目くやあきひらん  
虚病しく暫く出仕をとめけり六波羅乃越後寺仲時  
中於宮治部大輔公綱より楠退治を議せら色ハ公綱一議  
るも及ん七月十九日午刻に都を去り天王寺へ向ひける

補天王寺へ打く出て五月廿七日なり、隅田高橋の軍  
廿一日あり、荒り七月十九日に至る、十七日あり、  
際、捕代邊を退、捕あまを同く大敵をえ、是れ其  
補代一と宜かるか、  
小敵をえ、おそれと云ふと有り、とて廿日乃早見  
了、捕和田湯浅河内國へ引返すと云、綱天寺小押寄と時  
を他ると云とも敵かけ、出合、かく、日、日、日、日、日、日、  
大和河内紀伊五乃、かく、かく、かく、かく、かく、かく、  
と見、と云、綱、小、勢、あ、大、敵、く、圍、込、は、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
い、さ、や、系、於、へ、引、返、さ、ん、と、と、廿、七、日、乃、扱、さ、う、と、綱、京、へ、の、  
ま、け、也、は、そ、れ、曉、子、捕、屋、く、入、替、る、誠、了、宇、都、宮、と、捕、と、相、  
戦、く、雨、虎、二、龍、乃、魁、ふ、て、い、し、是、も、共、ま、死、を、同、く、す、と、  
了、一、度、ハ、捕、引、退、さ、て、謀、を、お、り、乃、外、小、旋、り、了、及、ち、宇、

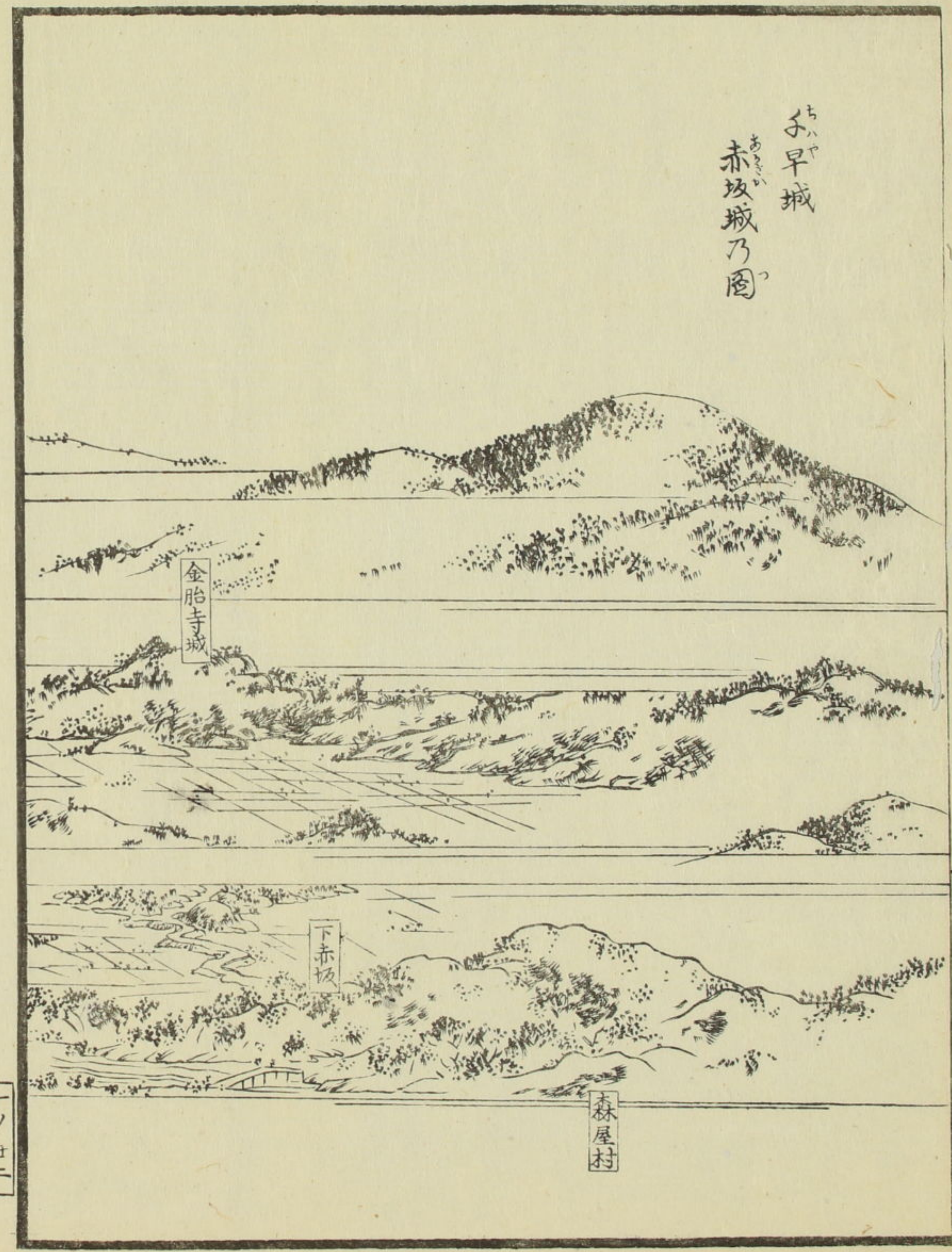
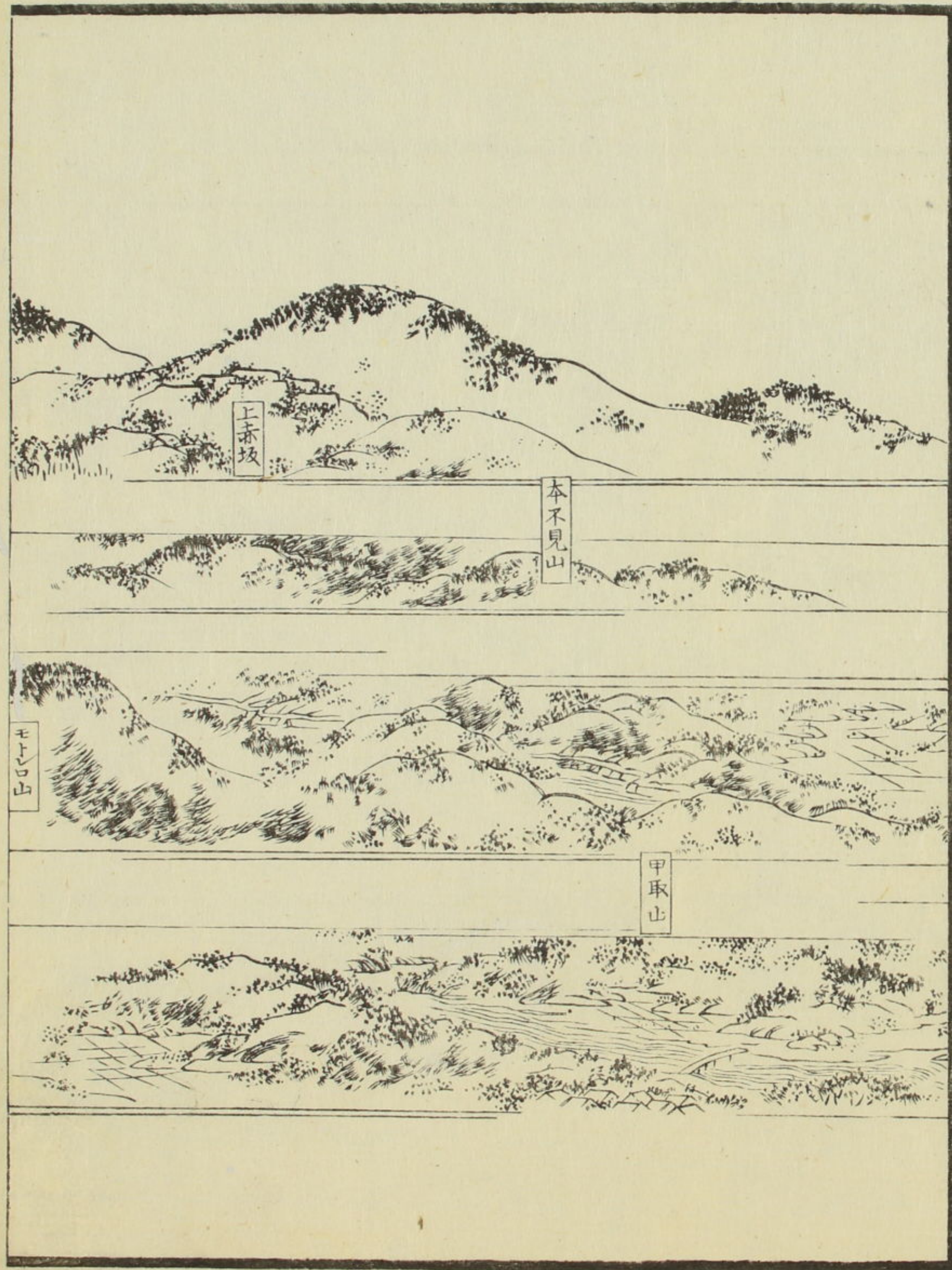
一ノ廿

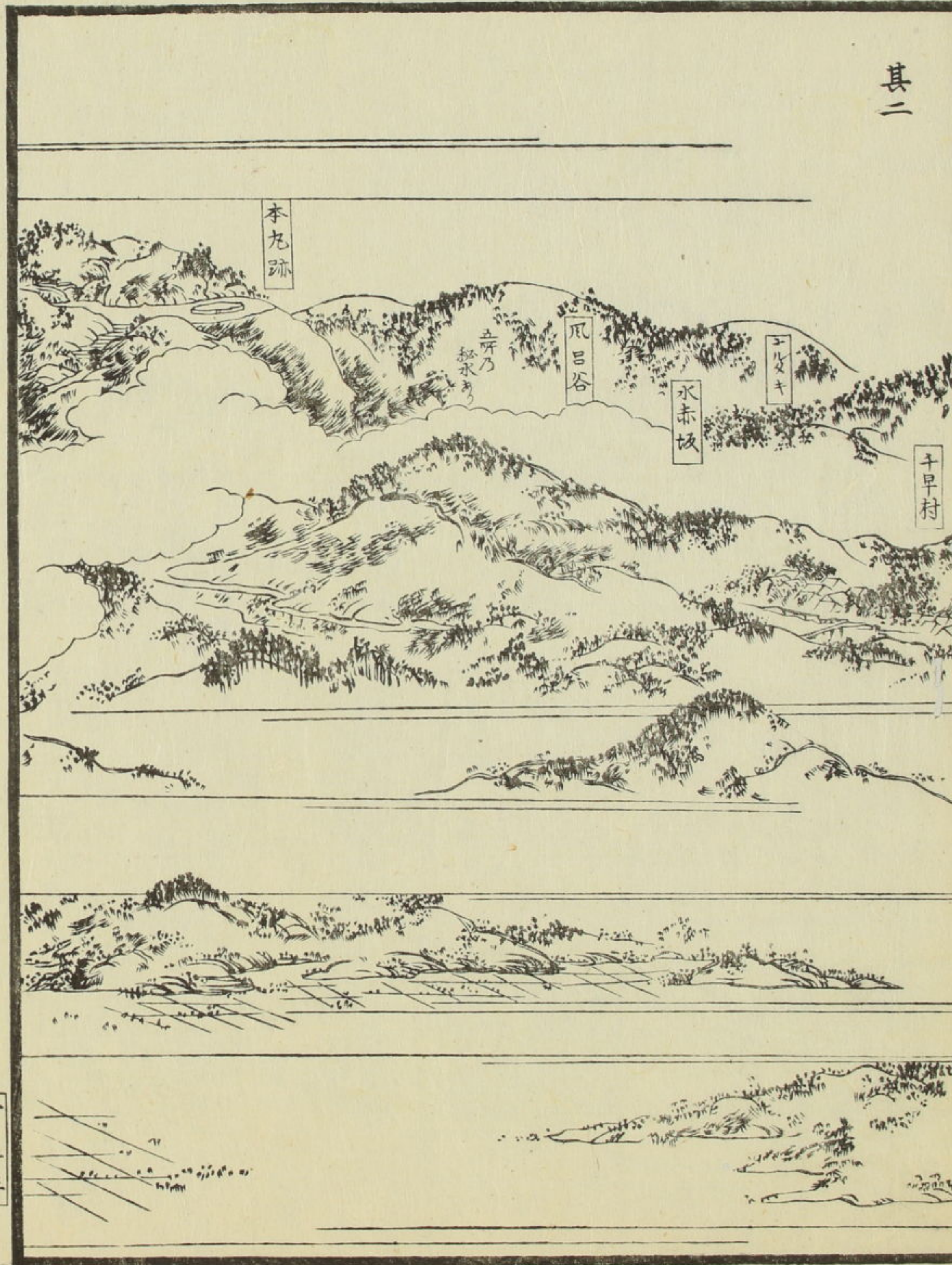
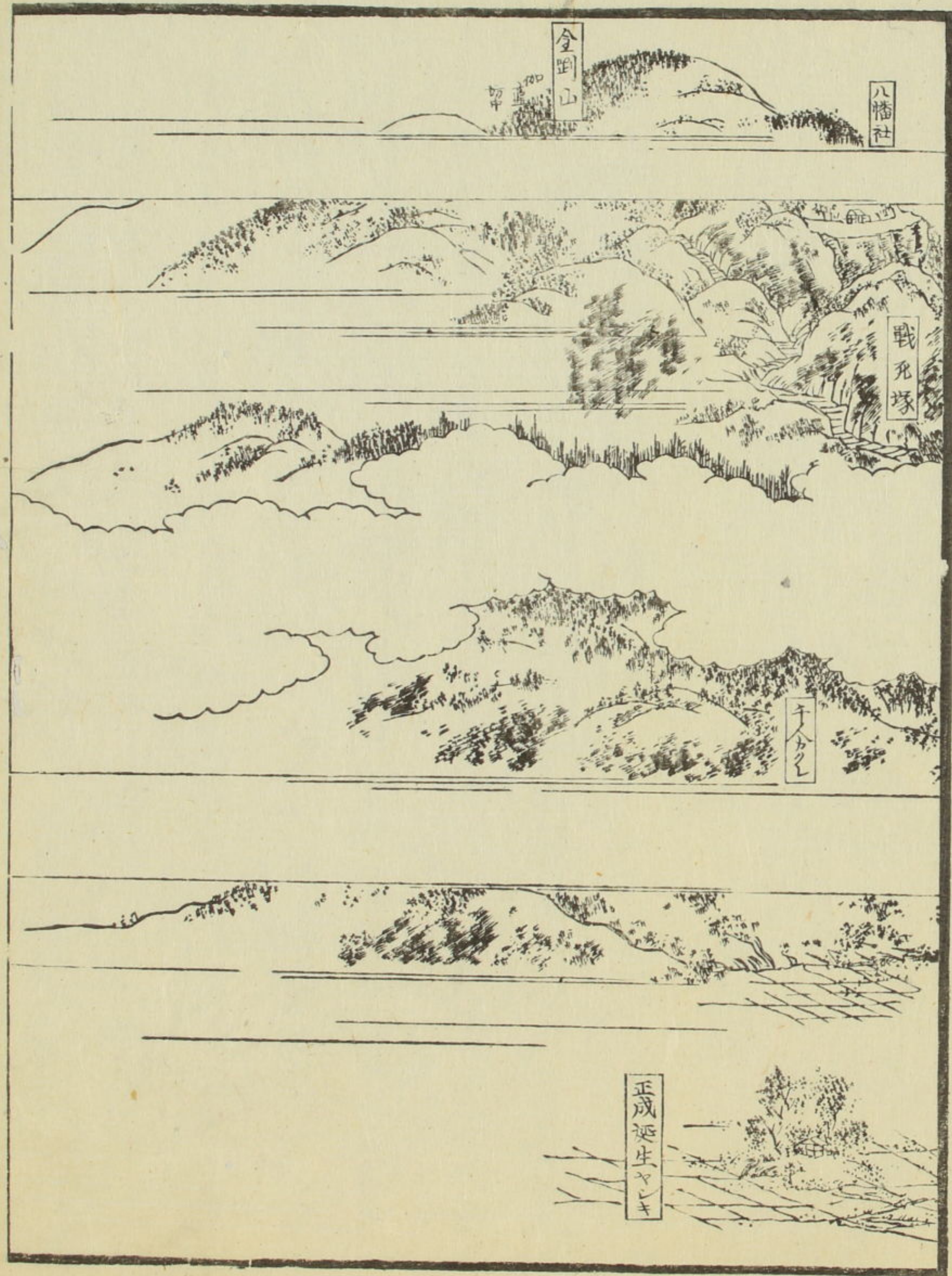
於宮引返一各を戦を所ある、全く以良将乃智謀符を合  
と、あ、り、如、一、と、感、さ、ぬ、人、い、あ、り、ら、う、

宇都宮治部大輔公綱、栗田侯白道兼、乃曾孫、不宇都宮  
座主宗園、讚、故、守、兼、房、了、九、代、乃、孫、を、り、拆、宗、園、権、門、勢、  
家、乃、曾、孫、と、し、東、山、邊、郵、へ、下、向、あ、り、い、と、ぬ、い、ふ、と、尋、  
ぬ、か、り、下、野、國、宇、都、宮、々、延、喜、式、了、い、と、ぬ、か、二、荒、山、神、社、  
形、か、よ、う、慈、覺、大、師、乃、本、居、神、と、云、を、以、く、天、台、乃、別、院、  
と、置、く、神、宮、寺、と、以、神、領、乃、田、畠、數、百、所、あ、り、け、を、を、以、  
て、別、當、檢、校、上、座、等、乃、綱、務、ハ、法、也、も、富、饒、あ、り、け、也、は、  
宗、圓、を、以、く、座、主、了、補、を、り、也、了、好、り、座、主、と、云、ハ、比、叡、  
師、を、仁、壽、四、年、延、曆、寺、座、主、了、補、を、り、也、了、初、と、以、其、  
より、今、ふ、經、く、天、台、座、主、御、相、續、あ、ま、し、と、也、寶、ハ、座、主、と、云、也、

寺務を執りし由ふく寺領乃敷計堂塔乃修造以下俗  
務を執りし役有りされハ金剛峯寺座主度山の座主あり  
餘多宗圓乃子宗綱も女叔父相摸守兼仲乃子も  
其家を嗣く子息宗房を生くも宗房を以て兼仲  
乃子も宗綱も大外記中原廣致乃婿とありけるも  
實父宗圓の許し中守守都宮乃座主職相傳たりその子  
朝綱謙倉右幕下頼朝卿の從ハ勲功ありしかハ小結  
城と同列し朝綱の子成綱成綱乃子頼綱頼綱乃子泰綱  
泰綱乃子景綱景綱の子貞綱もかゝるも綱乃父たり一族ハ  
上系中山塩屋山鹿鹿生を始し郎等ハ其紀法西黨乃  
勇士あり故に北系家もも賞給也も多ありし也  
正成卿内子慈愛を厚くし外も威猛を逞くしとい傳と

民屋了煩をかきし士卒不禮を盡されし所ハ其勢日  
小馳加里令ハ揚河泉乃間子楯川人々多りけり八月  
二日辰吉く系宿有く神馬之之を引連日天王寺ハ系  
淑く韃馬一之綾威乃澄一領白覆輪乃右刀を奉り大  
般若經を轉讀きし女也子乃未末記を拜見し天下乃  
及復之しうも人主上後醍醐天皇隱岐より還幸明年乃春の比  
か新屋しと統軍ハ教訓し早赤坂西城乃經良を急  
まけり  
千早城ハ河内國石川郡子早村乃上あり金剛山乃半腹  
ハあり山勢巍然し四面乃溪深き事東ハ百丈西ハ  
七十二丈南ハ八十丈北ハ三十丈東南乃同一徑あり





坂路嶮しく金剛乃山峯へ攀登る事廿八町中途に國見山あり  
天守乃跡と云れど一段言くく古松三株ありつれも  
大本あり枝葉地了葉より本丸二丸の跡蹟不ぞく櫓  
乃跡かと云數見也風呂谷と云あり水船をゆるく如と  
云傳入本丸跡乃巽乃方小正儀と河内名所國會ふ尼也國  
花萬葉記より東乃跡百八十六石西乃跡百廿六石  
南乃高さ百二十石北乃高さ百四十石あり城乃長さ百六  
十石月乾より辰巳へ城乃根界り九百四十石ありと云  
六所乃秘水一日より三石六斗許出る下の赤坂へ子早小  
六十一所令剛山本堂へ十八所と云

み及人 紀伊國伊都郡隅田庄 元弘三年正月晦日午早の城へ  
大佛右馬助高直 大佛修理大夫維貞の子 女万騎あり向ひ二月  
二日乃合戦了 寄手打負たりといとも同日阿曾孫正必弼  
治時赤坂乃城を合守右馬助了譲り子早乃寄手ふれり同  
廿日日赤坂乃城落たりいは合守も子早より加り二階堂  
出羽入道道蘊冬吉野城を落しと云也も子早子馳加り合  
八十萬騎あり入替し色久へ攻たりとい正成御防戦乃術突子  
撥る應り地利人私共り相應きといも子早子討死見しふ  
六人み及み負共を突捨すと云子執事十二人取盡三日  
三間系をおりいふ家きりまは各越越系水乃手了盡し  
て幕旗を奪えれあるは幕人形了遣えきく字子了欺

かときふより寄手ハ向城を去く他遠巻く如きありたり  
能多子三月四日園東より對陣し日を送るを能多へ守と  
下知せり能多は諸大將評定し堀を掘りて以て橋を他  
里城乃切岸の馬子打石を抛續松乃くめ子燒落され凶徒  
北條方又いふ人た一時滅ひたふは八大地獄乃有眼を眼  
殺りあらを能多里のりしけり能多は塔宮ハ大和行門紀伊  
國より旗を靡くをらと赤松入逸園心は播磨國より旗を止  
主上は隠岐國を御ありて舟より臨幸ありぬる中同之  
去うは寄手ハ日くふ色を去り城申次第了勢をひて寄手  
逃く落矢くめハ十萬騎と同之軍勢今ハ僅に十萬  
余騎了滅りたり去程り赤松軍勢了強く門大塔宮の

令旨より後ハ六波羅より押寄るかと同之ハは大佛合御の  
大将より六波羅へ引返すと六月廿二日主上船より還幸  
因廿七日播磨國書寫山へ臨幸六月二日正成卿七子孫孫  
あく兵庫へ御迎り能多今の兵庫門口所福嚴寺を以て御座所と以  
供奉し京所へ還幸ふ一を里六日了東寺へ入寺七日  
大内より入ら能多はけ能多去年死流乃郷相雲密は官位  
元乃如くた多くと勅定ありて能多喜乃肩を同り先帝  
院光嚴拜趨乃云卿ハ官を止め祿を奪くれと幕門圭密不  
眉を擯む七月九日ふは子早寄手十五人乃大将等を東  
ひ了て誅せられかく元弘中四年ふなりぬ三月北條  
乃一族了憲法僧正と云者有り前代の餘類を催し飲

盛ふりたる義正近郷を追捕と聞えり一は  
村乃東乃飯盛とありと云 義正成郷馳向く忽ちこれ  
を討平らぐべく正成郷を置り以て来乃勲功莫大あり  
と云 檢非違使を補し左衛門尉に任し檢津河内和泉之  
國乃守護職とふされたり

檢非違使廳を淳和天皇天長年中ふりて置  
これ職衛府乃追捕と彈正乃紀綱と刑部乃判官と京  
職乃新詔を多く使廳あり兼給へり故に國家の樞機  
と云 歴代ありて重職と云と職原抄に云く使廳乃  
別當一人冬儀以上衛門兵衛督を兼給人これ補し  
と云 佐二人 左右衛門推佐ありて使宣旨を蒙る尉  
二人を判

前と云 左衛門尉のからんは任と使廳ふりて衛府  
ありて尉乃こを判官と云故に捕判官と稱し形  
守護職を國中の盜賊謀叛の輩を追捕乃職ありて今  
乃國守乃如く全く知事すふりありて但段別立升乃  
米を收納と教定ふれと檢津河内國一萬六千五百廿七  
丁河内國田萬九百七十七町和泉國田に千百廿六町  
合さく三萬千六百四十町兵糧米一萬五千八百廿  
石ありて頃乃升今の九合六勺九撮七抄ふりて時  
今升ふ直し一萬八千二百四十石六斗六升四合七  
四斗儀三萬八千二百六十一儀六斗五升四合七  
建武二年是利尊氏國東ありて謀叛を一時新田左中將ハ



討平乃使々々東國より下向し正成卿の内裏守護のため  
京に留めらせける。同三年正月新田左中將合戦し打負  
上洛を執跡を追々尊氏大軍あり攻上ると聞えけし  
同月十日主上後醍醐天皇山門に臨幸あり正成卿の子餘路  
あり、宇治へ向らせける。比中を聞くと直子坂本へ急上り  
廿七日京を攻らせ、庵に定めらせし時、正成卿ハニ子  
餘路ふく西坂より出雲路に乃多子放火し一放槍乃輕  
かるく々々を引自在あるを以て上杉畠山ハ又万余騎を  
操立らせけ日乃合戦官軍忽ち打勝當氏丹波路を以て  
落しきぬ。正成卿と義貞朝臣と評定し、比夜ハ官軍ハ  
山へ引返しけしハ當氏より京へ引返し、唯是ハ廿八日

乃早速し正成卿謀く律僧を二三十人仰り、之を戦場の  
死骸を求め、勢て義貞顯家正成等の大将七人と付せ  
くりと位々引路人より、うら勢けしは當氏ありを聞くと  
實と似く、不頭を獄門に懸くり、又この夜正成卿不詳共  
了焼松城せ勢々二子小原鞍馬乃方へ下しけかと當  
氏ハ山門乃勢の落しきとおりのハ軍勢を四方へ引しけ  
京中よりハ喜勢かふのそから以皆逃めし、居しは當氏ハ廿九  
日乃卯刻に正成卿以下乃諸大将一同し押寄時乃殿を  
攀し、いは當氏大子驚くあり、あつめき、丹波路をさし、  
引退しけしは官軍北るを追、二月六日攝津國豊島郡  
豊島河原にて合戦し、當氏打負九列し、落しあり

主上京都へ還幸ありし色と申内裏ハ正月十日小  
つろつと日ぬき花山院へ移入清う一師一々日  
乃西近衛乃南一町を云なり今乃去程子字氏九列をかひ  
京あくは出木乃南高倉乃西不敵る  
か一月廿六日太宰府を打まく陸路をハ直義を大務めて  
廿万騎字氏を兵船七子又百餘艘を海路を攻よるう一  
えーは新田九中將を大將とて是を討平らぐ應と  
宣言を帯して西國を下向し正成卿亦同く池向  
義貞と力を合とんと仰下され色は正成卿畏て泰  
中けふい字氏筑紫乃軍勢を率とて上洛あせり荒手乃  
軍兵定めく雲霞の如くそいへる官軍撤疲せしめいへ  
對揚乃合戦定めく難儀り及ひいなり正成存正るる

お就きり新田九中將を召返され前乃如く山門へ陰幸あ  
りいへ正成も河内へ移下し屋をさ累と兵糧をく免  
り程あは筑紫九列乃勢と申次第不意下りいへその時  
新田九中將山門より正成河内より大子搦手二子ふもせしめ  
致しいへる字氏直義を誅戮せしめいへ仲時  
日左近を亡させ時乃如くいへると理を盡して諫せりか  
時益  
とも坊門法衣卿強く正成下向とへし申を執りしにより  
正成卿はよいとて八月十六日都を立ち又百餘騎をく兵  
庫へそ下り終けり正成卿是を最後と忠定めらるるか  
嫡子正行今年十一歳あく供したるを櫻井乃宿より河  
内へ返り遣りたり

事ハ正行の  
傳ハ并たり  
ゆへ正成卿義貞朝長不對

面し軍評定りり又月廿八日正成郷ハ湊川乃西の宿り七  
百餘騎みく相えく陸路乃敵了相向人直義乃兵共菊水  
乃旗をえくし紀敵なりと思われハ取給く是を討んとし  
け共正成郷と舎弟正季と東西南北へ追かひけ七夜今  
七夜より直義ハ五十万騎楠乃七百餘騎了馳かやまれ頃  
磨乃上野へ引退く直義ハ兵了薬師寺十郎次郎踏止く戦ハ  
ける間了漸落延ありと聞くと吉良上杉言不堂乃人ハ六  
余騎了下知くく楠の勢乃跡を切んと馳向人正成郷是  
と見く又えく返く之時聞り十六夜を戦く味方ハこれ  
ハ七十二騎了成ふくけ響みくも打破く落ハ落魚くけ  
是とハ正成郷系を出ししるむおりの定りし有るハ今ハ

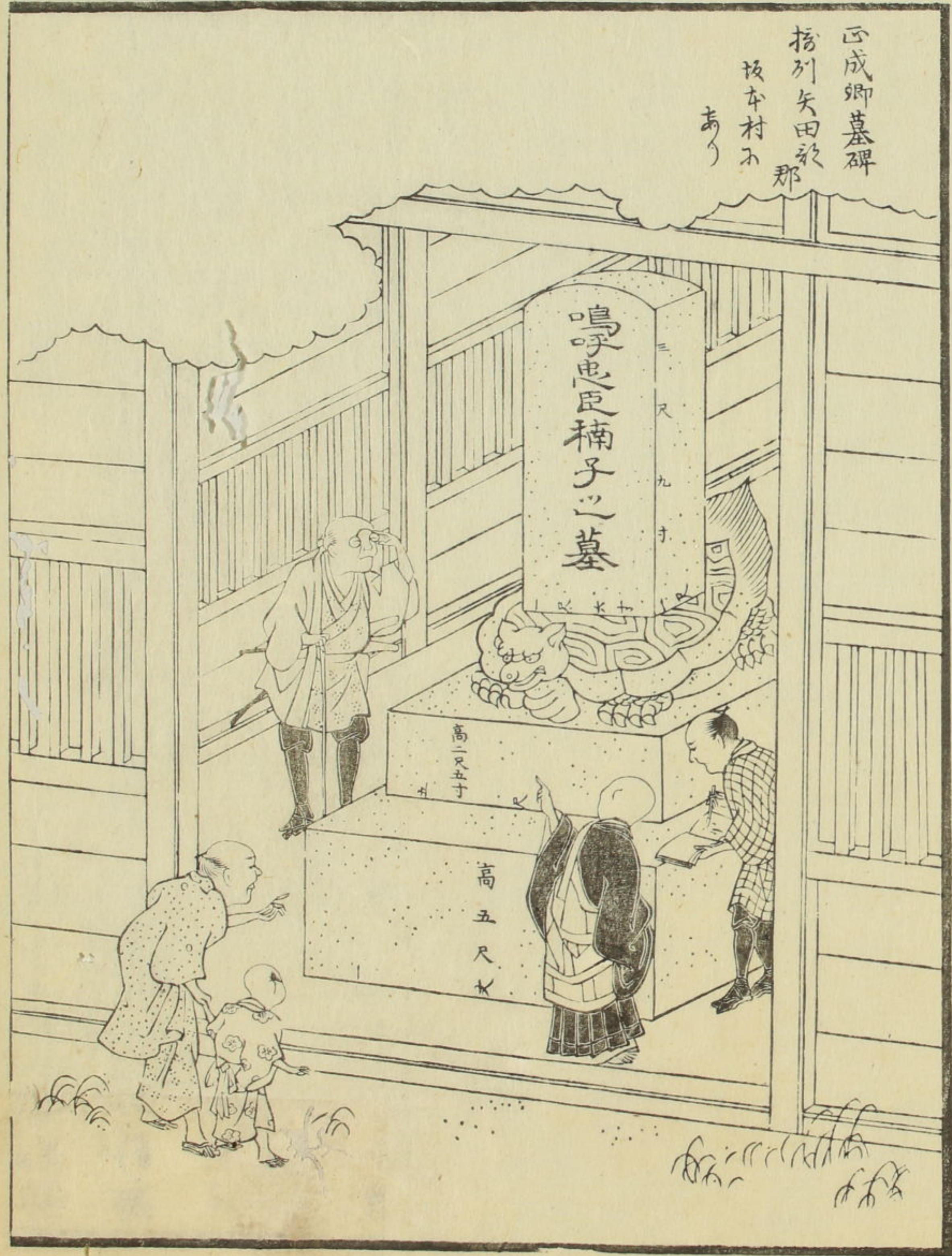
あせとそいさや腰を切んとて湊川乃北了南く左家乃一  
村育ける中へ走り入く一族十三人ハ乃者六十余人ハ間乃  
客教了二幼ふ並居て正成郷正季了向く折最後の一念ハ依  
て善悪乃性を引といふ九畧佛聲聞縁覺天人地獄乃間了何  
れハ御意乃預なりと同々れハ正季七生とハた同く人間ハ  
生色く朝敵を亡さくやとて存りへとハなれハ正成郷ハ  
さくらば同く生を留くハ本懐をなすへくと兄弟弟差  
遠くおあし枕了り終る春秋に十二歳天保壬寅年 五百七年 王三の由  
同くハ深く懐くを終るハ乃あまの正三位允迎衛中納を  
贈らるる多し世々くハ市志ハ後や

播磨國矢田郡郡湊川坂本村了醫王ハ廣嚴寶勝禪寺

あり開山ハ佛日煥惠禅師明極和尚正成郷遺骸を葬り  
菩提乃ためり南寺を開基と云傳ふ 明極和尚建武三  
當寺正成郷言翰あり年月文章疑へり故録さ  
正成郷墓ハ坂本村田乃中ふあり舊ハ一堆乃冢のこり  
松梅乃二本を栽たり元禄四年水戸中納言光圀郷石碑  
を建立せしを移し佐助三郎あまを移しと云後領  
主青山氏方之間乃雨覆を瓦葺ふ造立せり村老傳云  
一夜多く乃武士石碑を運送しと云りあり建武と云  
秋あけ楠公乃碑たると云りとい伝と何人乃云  
と云こを云り以て移す後水戸公乃命をらと云  
といふこと知せりとあり

國花万葉記及ハ楠律  
各所圖會著ふく

楠正成郷移り湊川乃戰場を逃れ東國かくれ姓を  
櫻井丸兵衛と更めり由兵衛茶話よりたりた  
證ありやあり以て頂梓行き理齋隨筆正成郷の事  
越前平泉寺の惠秀律師乃移しけり多正成郷地  
乃直無子黒系威乃澄因毛乃甲然取打たり枝菊乃  
物令傳り乃夫力を常系旃を胎し例より惠秀  
律師いふより移ると同ハ補陀乃浄土より来れ  
り消失ぬりふ受り上の方へ人を遣り哥を  
延元元年六月日未刻討死乃り平泉寺へ来れり  
時刻をりもたはりいと或寫本ふたりとあり  
と云伝りり系旃ハ正成郷の頃ハ



かつ最期の云葉子綴度由人間子生まき朝敵を亡不さ  
 やと云也たれ補陀落の浄土より平泉寺ありを迷  
 あふりあへきいふさらば惠秀律師乃許へ見え  
 と云い例乃浮屠氏乃勧誘の誕ふく正成卿まを映と  
 きりるゆき又枝菊の前立物といふいあらん菊  
 水ありあふき形うたし正成卿の茶立を獨録あり有  
 去々りまきハ正成卿元乃僧明極慧之依り系存せり作  
 以説あり栴極ハ元徳二年大宰府より来り元弘元年  
 不至王後醍醐天皇を擁し直子鎌倉より下向し建長寺  
 子住し後南禅寺子住し岳庵度嚴寺を用ひたりし延  
 元元年九月廿七日子遷化あり 栴極の傳  
 あり

塔中石櫃に圓鏡一面を藏む銘文あり楠正成靈源光圖  
造立とあり碑陰文を明朱舜水撰む十行跋文二行都  
合字数三百三十一字あり

河内國河内郡六萬寺村岩泚山往生院に楠公塔あり  
銘小從五位上橘朝臣正成靈光寺大圓義龍大居士於

插列兵庫湊川戦死とあり河内名所圖會

又錦部郡觀心寺小楠公首塚あり尊氏より贈り首級

を正行中院瀧覺に命じ華埋せし處と云東西八尺

八寸南北九尺八寸高さ三人乃石柵あり同

頼兼日本外史に云余數撰攝の間に往來を依時り櫻

井驛を尋ねしに山崎通至乃小村あり今昔驛路の

跡もあらず是利織田豊長の世を經る道里驛程乃改まり  
去とあるに代處ふ至る後ふ去ふ其心を見よと令剛  
公雲く後年之楠公乃義兵を揚らばしと云其置の  
小系上ありと合戦の勝負ハ時乃運りしよりふはハ強  
ちの敵慮を煩くし及ふ處より守たし正成いよと生  
有と関石にも聖運後子嗣の多しと思食されはへと  
中せしとかや夫一兵衛尉を以て天下乃重を自の任  
とかしりか言豈に乃時より身命を國乃為りし  
と云處よりなり骨も正成御乃日本國を引渡り戦を致  
さむし赤手みく江河を障かぬと云り果しと  
天日を既墜し回してり楠公乃令剛公より日本國を

軍兵を聚めく京も鎌倉もたたくはあ勇士かたりりい  
新田定利も容易く京鎌倉を攻落きしよりさらには還  
幸乃日爵を破り職を任む教楠公を以て首とあはれ  
愈さる終子結城名和と肩を比ふ教ぬをくみまをい  
乃市保と云へいあれよく中興乃帝徳とくくしつめ  
あまもろり定利尊氏乃叛るる小治く新田氏を上將軍  
と楠公いたくさ下知り之とらるくといさ家公助乃新  
田氏と及たぬうたぬあま一極色とも京鎌倉を亡く  
天下を一統きい楠公乃第うりあつされい新田氏  
代々公を用ひらぬあは必大上勝とあまへく討死と  
公の定めく遺言子我死も天下悉く尊氏あ返さへくと

宣ひかろ子孫を戒めて天子を守護せしめ志こは  
古乃大長と雖も何れ及ぬき子孫を訓をもち三朝六十  
餘年の久き際彈丸黒子乃地す正統天子を仰ぎ  
楠公は是利氏もあま其志を天下にあひけるは正統大  
子楠公を用ひ終る終とも楠公自天子乃守護とあはし  
多しと云へい云くといぬる  
了集く京鎌倉空虚なりと云ひあり日本國乃勇士金剛  
後守仲時を為す死を告ぐを教ぬ比百二十餘人鎌倉  
不相摸入るの勢子死を察くすれ去八百余人あは  
剛公乃寄手檢せし謀とらぬ一人乃其家了自  
むろふし終る時け無しと云ひ依りたりん又然城  
各和楠と肩を比ふ河魁守後を公入時ハ神の  
他了異なりと云くは一本草ハ新重の公災たり何  
たろ新田定利の確執ハ楠公乃典る所であら  
いらく尊氏討つた正統卿ハ將軍とあらねへまや

正成卿贊る正成臺車を迎奉る初る推井を蒙るおれ  
 則ち詔を異なり而廟謨より以元凶種と接し主驕長  
 使ハ老成持重の計を用ひと自弟里乃長城を壞る以  
 る強敵の勢をあし中興の業けより去多嘆子勝へん  
 や正成正季生を代く敵を滅んと云し云紫の唐の強  
 巡厲鬼とありて賊を亡さんと云ると何相似くるや  
 と記さしむしし徳當乃正論と云へきなり

先進繡像玉石雜誌卷第一終



